目次

はじめに……3
第1回　日本文学の源流と領域……5
第2回　日本文学の形態　1 韻文……9
第3回　日本文学の形態　2 散文……15
コラム❶七絃琴のこと　源氏物語を起点として……19
第4回　日本文学の形態　3 その他……21
レッスン❶……24
第5回　日本文学の理念　1 ますらをぶり、たわやめぶり……25
第6回　日本文学の理念　2 あはれ、をかし、つれづれ……29
第7回　日本文学の理念　3 無常、幽玄……33
第8回　日本文学の理念　4 妖艶、有心……39

第9回　日本文学の理念　5 風雅、わび、さび……43
第10回　日本文学の理念　6 滑稽、粋、通、意気……47
レッスン❷……50
第11回　日本文学の研究　1 古典文学研究史、作家論とテクスト論……51
レッスン❸……56
第12回　日本文学の研究　2 書誌学、文献学……57
第13回　日本文学の研究　3 その他……61
コラム❷致富長者譚を超えて　竹取物語再読……65
第14回　日本文学の課題　1 現代社会と古典文学、戦争と文学、環境と文学……69
第15回　日本文学の課題　2 地域と文学、日本文学の国際化、女性と文学……75
コラム❸宇治を旅する　地域の中の古典文学……78
おわりに……80

はじめに

この冊子は「日本文学概論」「日本文学」「文学」などの大学の授業用の教材として執筆しました。事実、この冊子の内容は私が大学で講義をした内容を基にしています。ですから、一種の教科書として考えていただいて構いません。また、この冊子は講義を受けなくてもそのまま読んでいただくことも可能です。その場合、どこからでもよいので自由な順番で読んでいただいて結構です。なお、本冊子は十五回構成になっています。第1回目を除き、日本文学の形態（第2回～第4回）、日本文学の理念（第5回～第10回）、日本文学の研究（第11回～第13回）、日本文学の課題（第14回～第15回）といったグループに分けられています。

文学というと直接実生活に役立たないもののように考える向きもあります。けれども、そこまで単純なものでもないようです。金銭的な価値とはまた異なる生きる意味を提示するのが文学なのだとも思います。本冊子はどのように文学作品と向き合うべきなのかといった問いに、しつこいまでにこだわろうと思って書いたものです。身近にある多くの逸話や噂や体験、そのすべてが実は文学なのだと思っています。文学と向き合うことは、実は自らの生活と向き合うことなのだと堅く信じています。そして、私は「言葉」が「世界」を変える可能性があると今なお信じている人間です。

本冊子はひとまず日本の古典文学に限った内容ですが、読者の皆さまにとって、広く文学的営為への積極的な関わりを期待するものでもあります。とは言っても、まずは古典文学を楽しみましょう。その楽しみの中から、人生の重みを感じてもらえるはずです。悲しい時にも嬉しい時にも必ず「言葉」や「歌」や「物語」があります。それでは、文学の素晴らしき迷宮へとご案内したいと思います。

日本文学概論ノート　古典編

レッスン解答例

レッスン①

あなたの知っている古典文学作品の題名を韻文と散文に分けてこの枠内に記入してください。

韻文
万葉集、古今和歌集、新古今和歌集、和漢朗詠集、金槐和歌集、拾遺愚草ほか
散文
古事記、源氏物語、枕草子、更級日記、平家物語、方丈記、徒然草、好色一代男ほか

レッスン②

あなた自身で新たに日本文学の理念を探し出して、それを説明してください。

理念名・（例）みやび
説明・「みやび」は「ひなび」の対義語である。「ひなび」が田舎を指すのであるから、「みやび」は都会的な言動を指すとひとまず言える。しかし、「みやび」は単に都会的であるだけでなく、それが特に文化的に洗練された場合を指すとも言える。『伊勢物語』の初段では昔男の言動について「いちはやきみやび」とし、和歌や恋のあり方により具体的な「みやび」を見出すことができる。後には、広く文化全般について「みやび」が用いられ、日本文化（主に京都的な様態）の洗練されたことを言うようになった。

レッスン③

あなたの考える作家論・テクスト論のよいところ・悪いところをそれぞれ書いてください。

作家論
よいところ・実際に創作した人物を知ることによって、作品世界の理解が進む。また、作家個人を探求する伝記研究においては、作家そのものの人生に学ぶことが多いと考えられる。
悪いところ・作品を理解する上で作家自身にあまり執着し過ぎると、作品に書いてないことまで考えてしまうことになる。また、古典文学では作者不詳もしくは作品以外にほとんど情報のない場合が多く、作者像がそもそも安定していない。

テクスト論
よいところ・作品から作者を除いて考えるのであるから、自ずと作品世界を集中的・客観的に考察できるはずである。作者を無視しても、作品には「語り手」がおり、その「語り」からも言説分析は可能である。
悪いところ・作者という作品背景を除外することで、作品の読み方が自由奔放になる可能性がある。作品は読者のものでもあるが、かと言って作者を無視してどんな読み方をしてよいというものでもない。